フライブルク大学哲学科「フッサール・ハイデガー講座」存続の請願書

Heidegger-Forum Japan

先日の報道（『フランクフルター・アルゲマイネ』紙・本年二月二十七日号）によって、目下フライブルク大学哲学部哲学科では（a）旧来の講座の一つを廃止し、それに代えて（b）分析哲学系のジュニア・プロフェッサー職を設置する計画が進行中であることが伝えられました。しかもこれが虚報ではなく、事実に相違ないことを同哲学科関係者に確認したという続報まで届きました（『バーデン新聞』・本年二月二十八日号）。

フライブルク大学哲学科といえば、かつてエドムント・フッサールが、続いてマルティン・ハイデガーが講座の主任教授を務め、現象学（および解釈学）による画期的な哲学運動の揺籃となり、そしてその後も今日にいたるまで、当該運動の一大拠点としての盛名を全世界に馳せている所です。現にその栄えある講座には、今もなお数多くの学生・研究者がドイツ国内のみならず、世界各国から集まり、たがいに切磋琢磨していることは、周知の通りです。しかるに上述の新聞記事によれば、このいわゆる「フッサール・ハイデガー講座」こそが、同哲学科においていままさに廃絶の憂き目に遭わんとしている当の講座に他ならないとされています。

以上の報道に接して、われわれ日本の哲学者は大変な衝撃を受けました。「フライブルク詣(もうで=Mode)」という言葉に象徴されるように、わが国の哲学研究は、その今日までの発展において、フライブルク大学哲学科とはまことに因縁浅からぬものがあります。田邊元、九鬼周造、山内得立、三宅剛一、西谷啓治、辻村公一、渡邊二郎など、そのことを証立てる先人の例は枚挙にいとまがありません。彼らは、いずれもわが国の哲学研究の礎となった人士ばかりです。近現代日本の哲学にとって、「フライブルク」の名は、フッサールおよびハイデガーと結びつけられることによってこそ、特別な意義をもつものなのです。こうした歴史的経緯に鑑みるにつけ、われわれもまたフライブルク大学哲学科の今回の改革案に関して拱手傍観してはいられません。ここにわれわれは「フッサール・ハイデガー」以来の伝統の存続を心より希望致します。

上記の新聞報道の後、われわれは本件に関するフライブルク大学の公式発表（本年三月十日付）に接しました。われわれの理解によれば、そこでは次の二

点が明言されています。(c) このたび新設されるジュニア・プロフェッサー職は「近現代哲学講座」のテニュア・トラックにすぎず、したがって前者の設置に伴って後者が消滅するわけではない。(d) 本ジュニア・プロフェッサー職の担当者（およびこの職を経た本講座教授）に期待される専門領域は、あくまでも「古典的」な論理学・言語哲学であって、分析哲学ではない。

なるほど本発表では、先日の報道において問題視されていた二点の変更（(a) と (b)）をフライブルク大学としては行うつもりがないことが正式に宣言されており、その限りでは朗報であるのかもしれません。しかしながら (d) で述べられている「論理学と言語哲学」という研究分野の余りにも狭い限定のもとでは、フライブルクの現象学・解釈学は、単に哲学のみならず、医学、看護学、社会学、心理学、教育学など、他の学問分野に対してもこれまで有していた世界的な影響力をもはや維持できなくなるのではないでしょうか。それどころかそのような限定により、いわゆる「フッサール・ハイデガー講座」の性格は実質上、根本的に変質していくおそれすらあります。まさしくこうしたことこそが、われわれがなおも憂慮している点に他なりません。

今回の変更計画が、「フッサール・ハイデガー」という名称に体現されてきたフライブルク大学哲学科の栄えある現象学・解釈学的伝統の事実上の杜絶を招き、これまでの輝かしき日独相互の学術交流の歴史と将来におけるその更なる発展に終止符を打つという痛恨事に至ることのないよう、ここにわれわれは「フッサール・ハイデガー講座」の健全な存続を強く求めます。

ハイデガー・フォーラム

安部　浩　（京都大学）
景山　洋平　（東京大学）
木村　史人　（立正大学）
佐々木　正寿　（高知工業高等専門学校）
陶久　明日香　（成城大学）
田端　健人　（宮城教育大学）
松本　啓二朗　（大阪教育大学）
松本　直樹　（同志社女子大学）
嶺　秀樹　（関西学院大学）

森　一郎　（東北大学）
森　秀樹　（兵庫教育大学）
山本　英輔　（金沢大学）
山本　與志隆　（愛媛大学）